

#### ●▲■ はじめに

日本の酒蔵はいったいどのように変化を遂げたのか。現在も一般的に酒蔵は土蔵造りのイメージが強い。そこから抜け出すことはできない。大手の酒造メーカーの過半は鉄筋コンクリート造の倉庫のようにみえる酒造工場に切り替わっているにもかかわらず、依然として土蔵造りの酒蔵が原風景として、ある。なぜなら、土蔵造りの酒蔵が長い時間をかけて定着したスタイルであったことが背景としてある。ビール醸造所が赤煉瓦の建築のイメージ、ウイスキー蒸留所がキルンを掲げる石造のイメージと同様のものといえる。ここではわが国最大の酒造地帯、灘五郷を事例にして、土蔵造りの酒蔵の変遷をみる。

#### ●▲■ 1 江戸期の千石蔵

到達点としての酒蔵に千石蔵がある。千石蔵とは一日 10 石の米を 100 日で仕込み、千石の造石高が得られた酒蔵である。江戸後期にこの形式が完成したもので、ここでみる図 (図 1) は本嘉納家所蔵の平面図による。幕府への提出図面であり、天保年間 (1831 年から 1845 年) の作成といわれる。灘五郷を経済史から研究した柚木学によれば、千石蔵の灘での一般化は文化・文政期 (1804 ~ 1830 年) という。このことは柚木学の『日本酒の歴史』(雄山閣出版、1975) に詳しい。

千石蔵には平面計画的には次の 3 つの形式があった。

一点目は大蔵 (仕込蔵) と前蔵を一行にならべ、棟方向を一致するもの。二点目は大蔵と前蔵が矩折り (鍵型) となるもので、

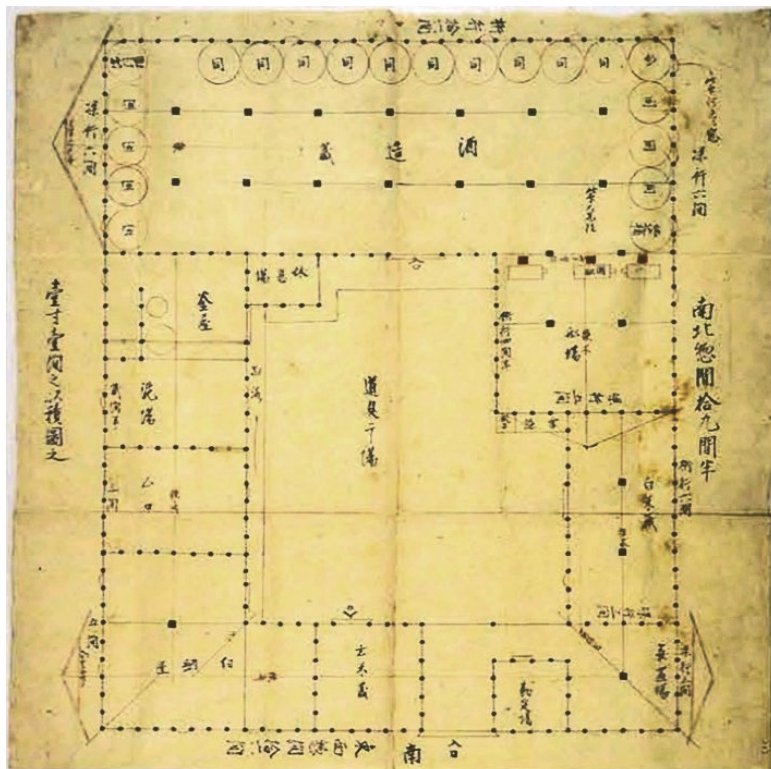


図 1 天保期、千石造りの酒蔵の平面図 (本嘉納家所蔵)

理想の千石蔵であった。三点目は重ね蔵の形式で、大蔵と前蔵が南北に並列するものであった。

本嘉納家文書の図は口の字型となっており、出入口は一箇所で南側の長屋門のような建物に設けられており、管理がしやすいようになっていた。また重ね蔵ではなく、北側に大きな仕込蔵があり、ここで醸造と貯酒もおこなうようになっていた。仕込蔵は二階建てで、梁間六間、桁行十六間あり、明治以降の大蔵の大きさとほぼ同じとなる。洗場釜屋・船場・室・白米蔵・玄米蔵・杜氏や蔵人の寝屋・食堂なども備わっており、このひとつの空間で酒造が完結するようにつくられていた点が特徴となる。

千石蔵誕生以前は居宅併存型が多く、このような千石蔵は複数の酒蔵を稼働させる酒造家のみが持ち得たものであった。

#### ●▲■ 2 明治期の酒蔵

灘五郷の酒蔵の建築的内容について、最初に記した刊行物は花木喜助の『摂州灘銘酒正宗醸造法』(明治 35 年) であり、そこでは当時建設されていた酒蔵のプラン、構造、構成などが記されていた。なお花木喜助は御影在住であり、花木といえば、西郷の新在家で「富久娘」をつくっていた花木甚右衛門や銘柄「娘盛」をつくる花木兼松がおり、その一族の関係者であった可能性がある。以下その記述を記す。

「酒造蔵は多く南面に建設せらる。其土地の坪数は大同小異なりと雖重もに酒造蔵は梁行六間、桁行拾五間、乃至貳拾間、瓦葺二階建とし、之れを大蔵とす。其前に梁行五間乃至、六間にして桁行は大蔵と比しきものとし、搾り場を除くの外は二階建とし、之れを前蔵と云ふ。又其前に適宜に貳間乃至三間の葺卸しを附し、其所に会集場 (蔵人工人の休憩所) 及び洗場釜屋等を設く。搾り場は前蔵の中に設け 廻室は前蔵の中或は其前の西又は東に建添へ、之れを設く酒造蔵の高さは三間の軒にして 前蔵の中より梯子にて昇降の便をする様に設け前蔵より大蔵に入る可き出入口を (巾壹間半) 大凡そ蔵の中央に附し、横窓は (三尺角) 貳間毎に附す而して 二階には常に不用の桶樽及諸器具を置くべし。醸造始れば酀 (酒母) 製造は二階にて。之れをなす。今其概略の図を示す」

ここでいう概略図が図 2 であり、先にみた本嘉納家の千石蔵とは異なり、「大蔵」のほかに「前蔵」があって「重ね蔵」になっている点が特徴となる。またプランは口の字ではなく、コの字となっていた。仕込蔵の大きさは共通する。このプランと共通するのが明治 27 (1896) 年に建設された南辰馬家の煉瓦造の酒蔵である。

#### ●▲■ 3 「長屋型酒蔵」の誕生と煉瓦

明治中期以降、酒蔵の建築様態に大きな変容が現れる。長屋のように同一の型の酒蔵が壁一枚で隣接する蔵が出現する。接合される数は二庫のものからはじまり、最大で六庫連なるものまで現れる。そこでは同一の間取りの酒蔵が連なる。

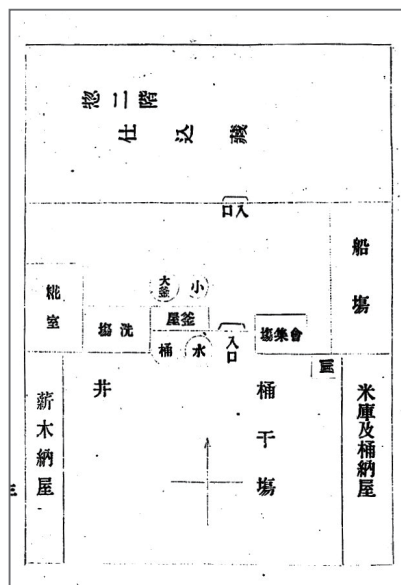


図2 明治期「重ね蔵」の配置図・花木喜助 編『摂州灘銘酒正宗醸造法』明治35年

「此製造場中には一製造場で十蔵又は十三蔵棟を並べて一区内に建て連ねれば、其宏壮なる遣り方は人目を驚かすに足るのである、故に一区域の製造場の造石高一万三四千石に達するような大規模のものがある」

「長屋型酒蔵」は明治前期にはなかった形態であり、増え続ける灘酒需要に応じて生まれた酒蔵の形式であった。このような形態が採られた理由は次の2点が考えられる。一点目は面積が定まった敷地の有効活用によるもので、二点目は新しい技術である蒸気や水力などを効率的に共同で利用するために近接する必要があったことによる。二点目については前記の「灘五郷の今昔」によれば、次のように詳述される。

「之等は概ね煉瓦造りの酒蔵で新式諸器械の応用製造場を設けて居る、故に搾器械は人力を省きて専ら水圧力に依り、洗水及び其他の用水はオーシントンポンプを据え付けて自由自在に供給する事が出来る、湯を沸すには蒸気力の応用釜でどんなに沢山の湯を沸す事も出来る、米を蒸のにも此蒸気釜を使用する、工場内の地盤はコンクリートで固めて湿潤を防ぎ清掃にも便利にしてある、文明的の設備は年毎に改良設備されて、目下では各蔵共に電燈を使用して居る」

ここでのオーシントンポンプとはウォシントン式ポンプのことだとおもわれる。ヘンリー・R・ウォシントンが開発した蒸気駆動式の往復ピストンポンプである。ボイラーのある蒸気プラントではよく使われた。

またここで記される酒蔵が「概ね煉瓦造り」であったとの確認はとれないが、想起されるのは辰馬本家の双子蔵である。そのほかに南辰馬家や若井酒造、本嘉納酒造、山邑酒造なども煉瓦の酒蔵を有していた。また壁一枚で隣接する土蔵造りの酒蔵ではその界壁に煉瓦造が採択されることが多く、全体に煉瓦造への指向があったことは否めない。おそらくはこのことを指していつているのだろう。各酒蔵の煙突が煉瓦造となるのも明治前期の頃からである。

酒造界で煉瓦造への指向がいかに強かったのかは、西郷の若井源左衛門と西宮の辰馬一族が建築用煉瓦を製造する「煉瓦石」製造業をもおこなっていたことからわかる。若井家では大阪堺で明治

すなわち標準設計によってつくられたものである。ここからは「長屋型酒蔵」とみることができる。また連なるものだけではなく、一区画に密集した蔵の一群も誕生する。長屋型の酒蔵が何列にも配置される。このような様態からは「集団酒蔵」とみられることもできる。

大正2(1913)年6月29日付けの「灘五郷の今昔：昔の醸造高八百四十石今の醸造高四十六万石」(『報知新聞』)によると、このような連なり、集まった酒蔵のことが次のように論じられる。

18(1885)年より、辰馬家では明治21(1888)年に吉左衛門・悦蔵・半右衛門が共同で辰馬組煉瓦製造部を西宮に設立し、それぞれ煉瓦石製造業をおこなっていた。

「長屋型酒蔵」を可能にしたのは耐火構造がうたわれた煉瓦による界壁の存在である。煉瓦の壁は土蔵にくらべて材料費が高額な上、深い基礎を必要として工費も余計にかかったが、より耐火性に富むと考えられ用いられることとなる。すなわち、全体を煉瓦造とするには従来の土蔵造りの酒蔵の数倍の建設費が必要とされ、そのために界壁という一部だけが煉瓦造となる。その背景には煉瓦造の酒蔵が明治中期より一部において誕生していたことが関係する。「長屋型酒蔵」が灘五郷以外の酒造地で生まれていたのかは定かではないが、おそらくは灘五郷が先駆けており、満州や朝鮮でいくつかの展開があったにとどまる。

昭和初期にはこの煉瓦造の界壁は鉄筋コンクリート造にかわるケースも現れる。関東大震災で煉瓦造の脆弱さが露呈し、耐震性が備わった鉄筋コンクリート造となる。

#### ●▲■ 4 「長屋型酒蔵」の事例

「長屋型酒蔵」の判明した具体的な事例を辿ると、明治27(1894)年の辰馬本家が最初で、次いで明治28(1895)年の花木甚右衛門、明治29(1896)年には西宮酒造と若林酒造、明治31(1898)年には若井酒造と石崎酒造が、明治43(1910)年には菊正宗と桜正宗が、大正7(1918)年には白鶴酒造が、大正15(1926)年に大関が、とおよそ30年間に新しい理想的な長屋型酒蔵をはじめとする集団酒蔵が建設される。

建設時の図面の閲覧が許された本嘉納家の嘉實蔵(大正後期)をみると、同一の大きさの酒蔵が六庫連なり、同一の敷地のなかに計九庫あった。1庫の大きさは間口14.3間(26m)、奥行18.2間(33.12m)、手前が前蔵で、奥が大蔵、共に2階建て、その間に1間(1.82m)の通路が空き地となっており。前蔵には麹室、搾り場があり、出入口際に洗場、ボイラー兼煙突、杜氏・蔵人の居住スペースがある。出入口の外側は隣り合った酒蔵と共有の桶干場となる。この九庫の貯酒庫として、冷蔵貯蔵庫が設けられていた。

なぜ長屋型酒蔵を含む集団酒蔵が建設されたのだろうか。明治中期から昭和初期にかけて、大手の酒造家を中心に、本来酒蔵があった旧市街地から少し離れた、それまでは田圃であった土地「新田」を造成して、計画的に一挙に建設されたことが関連する。通常酒蔵のおよそ10倍の敷地面積であり、江戸時代にはなかったものである。そのため、これら集団酒蔵の景観はこれまでになかったものゆえに、前述した「人目を驚かす」こととなったようだ。

その目的は右肩上がりで毎年激増する需要に備えるためであり、敷地の有効利用のために対する生産システムであった。新田蔵という、千石から千五百石の酒蔵が長屋のようにひとかたまりに集まる集団酒蔵であり、明治から昭和初期に大手の酒造会社を中心に新規の酒蔵を設ける際の最多の手法であった。

精米については灘五郷の各郷で差異が生じており、西宮や今津では水車の場所からは離れていたため早くから蒸気を使用される。このことは前期の「灘五郷の今昔」によると、

「五郷の内魚崎、御影、都賀浜の三郷は酒造場と水車場との距離が遠からずして地の理を占めて居るので主として水車を用いて居った。西宮、今津の両郷は水利の便が乏しいので早くから蒸気力を用いて居た」とある。



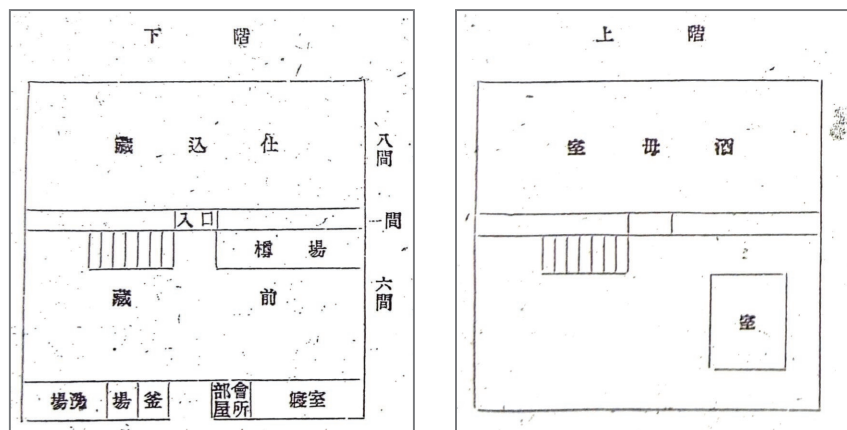


図3 大正期の酒蔵の標準（『灘五郷酒造一班』大正8年、による概略図）

### ●▲■ 5 大正期の酒蔵

大正期の酒蔵の理想的なありようは大正8(1919)年に西宮税務署がまとめた『灘五郷酒造一班』に次のように記される。

「醸造蔵として古きは二百有余年を経たるものあり、今津西宮方面は比較的古建築多く、灘三郷（魚崎、御影、西郷の三郷を称して云ふ）に於ては新築称々多し、一般に新らしき酒造蔵としては、壹個半仕舞千余石造りを基本とせり。普通は仕込蔵、六間（10.9m）に十七、八間（30.9m）又は八間（14.5m）に十三、四間（23.7m）を有し、前蔵は仕込蔵と並列し、六間の奥行を有するを見る、仕込蔵には総二階又は中二階ありて、酒母仕込に利用し、前蔵に洗ひ場、釜場、樽場、室を設備す、近來新築の理想となすものゝ概略図（図3）は左の如し。麴室には半陸室、陸室（おかむろ＝一階）、二階室の三種ありて大体に於ては陸室を多数となし、新築蔵に於ては二階室となすもの多し」（図3は筆者が記す）

灘三郷には明治以降に多くの酒蔵が新設されたことがわかる。ここでの酒蔵では従来の千石蔵ではなく、一千五百石蔵が基本となっていた。したが、仕込蔵の梁間は明治前期のものより大きく八間となる。造石高が1.5倍になったのは仕込蔵の、より大型化が関係していたものと考えられる。大型化に伴い屋根の形が変化し、それまでは切妻が多かったが、半切妻の形となる。その小屋組は西洋技術のトラス構造が用いられ、大規模化を支える。また麴室には陸室が推奨されている。現在は麴室は過半が二階に設けられるが、この時期では外気から隔て、中の温度を一定に保てるように地上につくった構造物が用いられていた。灘五郷の酒蔵数は大正10(1921)年が最大で四百八十六庫が確認される。その後は減少する。

### ●▲■ 6 昭和戦前期の酒蔵

昭和に入るとより組織だって酒蔵のありようが問われはじめる。日本銀行調査局が昭和六(1931)年に刊行した『灘の清酒 昭和五年十一月神戸支店調査』によれば、

「酒造蔵の大きさは酒造家の大小に依り、又地形等の関係上不同であるが、其構造に於ては相似ている。普通千石蔵が標準となっており（但新造のものは千二、三百石標準）之は奥行十二間、間口十八間内外の二階建である。一蔵の奥半分は仕込蔵と称へられる所で、所謂仕込桶が並置されてあり、前半分は前蔵と称へられてい

るが、之は蔵ではなく寧ろ蔵前の広間とも見るべく、其一部は蔵人の起臥する畳敷（十畳乃至二十畳敷）の室となっており、他は土間で、釜場、洗米機、又は洗米場、酒槽等の設備がある。二階は酛の仕込場、麴室、道具置場等になっている」

ここからはこの酒蔵の大きさが『灘五郷酒造一班』の延長線上にあることがわかる。土蔵による酒蔵はここのように微調整をおこないつつ、昭和一桁台に完成形となった。『灘の清酒 昭和五年十一月神戸支店調査』には「酒造場敷地」という項目もあり、ここには次のように記される。

「酒造場としては酒造蔵敷地の外桶等の乾場用空地を要するから、相当広大な土地を必要とする。千石造一蔵の酒造場としては二百坪余の酒造蔵敷地の外約三百坪の乾場用空地を取入れて合計五百坪が相当であるといふ」

昭和初期には西宮郷の2つの酒造会社で鉄筋コンクリート造酒蔵が誕生する。灘五郷では最初の試みであった。白鷹の北店蔵と大北蔵が昭和4(1929)年に、辰馬本家の白鹿館が昭和5(1930)年に完成する。戦後に急増する酒造工場の先駆けであった。

### ●▲■ 7 その後

空襲で灘五郷の酒蔵は約70%を失う。敗戦直後の20年代前半は簡素な土蔵造りで復旧するが、昭和25(1950)年以降は鉄筋コンクリート造にかわっていき、土蔵造りの酒蔵は昭和20年代を最後に建設はない。その結果、灘五郷が全国で最も早く酒蔵の鉄筋コンクリート造化を成し遂げる。このことが生産量を劇的に増加させることとつながる。一方伝統的な土蔵造りの酒蔵を失うこととなる。

確認される最後の土蔵造りの酒蔵は昭和24(1949)年に完成する西宮酒造の本蔵五番である。設計した西宮酒造の建築技術者・阪下圭彌によると、蔵の規模として、「一蔵の敷地は500坪、建坪約300坪を要する。蔵の構造は南面して、東西の棟とし三棟建であって、南に平屋建の前蔵、次に二階建の中蔵、北側に二階建の大蔵となつて、東西桁行二十間、南北梁間十五間の一団の建物で、矩形の平面をなしている」（『灘の酒蔵』『建築と社会』31(12)、日本建築協会、1950-12）とある。

前記の『灘の清酒 昭和五年十一月神戸支店調査』の酒蔵の面積が216坪であったことと比較すれば、ここでの面積は1.5倍となっている。また蔵の形式に変更があり、それまでの2棟からなる重ね蔵ではなく、3棟形式となる。酒造会社の営繕業務に長く携わった建築技術者が考案した酒蔵であった。いわば最後の伝統的な酒蔵といえる。これを最後に本格的な土蔵造りの酒蔵はつくられることはなくなる。

その理由は二点あり、一点目は大手酒造家を中心にして、生産性にすぐれ、耐震耐火半永久の鉄筋コンクリート造酒造工場に建て変わることである。立体化が可能な鉄筋コンクリート造では同一の建坪で数倍の生産量の増加が図れた。10倍になる事例も確認される。二点目は日本建築学会が昭和34(1959)年に発表した「木造建築禁止令」であり、一定規模以上の建物は鉄筋コンクリート造か鉄骨造でなければ建築許可がおりないことが大きく左右する。



●▲■ 結び

1) 灘五郷の酒蔵は明治中期から蒸気汽罐による動力化がおこなわれ、仕込蔵は煉瓦蔵となる事例も現れる。小屋組は西洋技術のトラス構造が用いられ、大規模化を支える。

2) 明治中期以降、昭和初期まで土蔵造りの酒蔵に関して、より理想的な酒蔵を求めて酒造技術者や所管の税務署によって、模式的な平面図である概略図が描かれるが、基本的には江戸後期に誕生した千石蔵の延長線上にあった。土蔵の酒蔵では構造的に二階以上は困難であり、プランニングにも限界があった。

3) 明治中期から大正期にかけての灘五郷の酒蔵に特徴的な現象は「長屋型酒蔵」の誕生にある。そこでは長屋のように同一の型の酒蔵が壁一枚で隣接する蔵が出現する。一区画に 10 庫前後あり、全体で一万石を超える生産量となる。増え続ける需要に対する供給手段として、大手の酒造会社の間でつくられた。

4) 戦後は灘五郷では土蔵造りの酒蔵建設は潰える。理由はいくつかあるが、鉄筋コンクリート造の立体的な酒造工場に置き換えられる。生産量の劇的増加がはかれることを理由とした。

(Text: T. Kawashima)



図 4 若井酒造・牡丹正宗（明治期）  
明治期に白鹿に次ぐ全国 2 位の出荷石数だった



図 5 花木本家・富久娘（明治期）



図 6 菊正宗・新田蔵 住吉川東岸（明治 43 年）  
桶千場の様子



図 7 菊正宗・嘉宝蔵・全景（大正期）「長屋型酒蔵」切妻屋根



図 8 白鶴・呉田蔵（大正期）「長屋型酒蔵」半切妻屋根

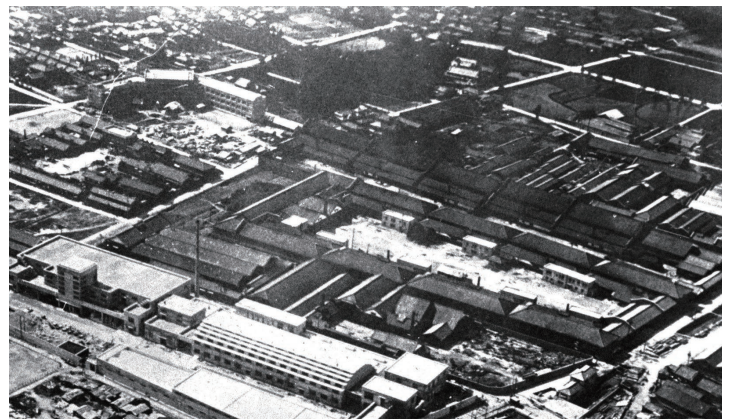


図 9 白鹿・新田蔵と白鹿館（手前のドーム状建物）・空撮（昭和戦争前期）

川島 智生（かわしま ともお）

1957 年 広島県 鞆町生まれ

1998 年 「学校建築史」で博士号（京都工芸繊維大学：PhD）

建築史家、一級建築士、前・京都華頂大学教授

神戸情報大学院大学・客員教授、大手前大学・客員研究員

著作：『近代京都における小学校建築』『近代神戸の小学校建築史』

『近代日本のビール醸造史と産業遺産』など多数

月刊誌「醸界春秋」（※）に、34 年間にわたって『醸造家と建築』

を 191 回連載（※ 2025 年 9 月号で廃刊）

QA? 本稿に関するご質問・ご意見等は、きた産業  
[info@kitasangyo.com](mailto:info@kitasangyo.com) にご連絡ください。筆者に転送いたします。